

『古今和歌集』 仮名序の用字法

—「お」「於」「を」「越」を中心として—

松 本 美 恵

はじめに

「仮名序」は「歌本文」と同様に仮名文字を中心として表記されたものであるが、和歌とは異なり散文であり、また和歌の表記においては藤原定家が一行書を唱え、漢字を多用するなど作爲的な要素が多く含まれることから「仮名序」を対象とし検証を行う。そして散文であることから当時の日常に通じる仮名文字遣が垣間見られると考えられる。

本稿においては各写本において「お」「於」「を」「越」の仮名文字遣には様々な点で異なりが見られることに焦点を当てて検証を行いたい。

「お」「於」「を」「越」の仮名文字遣の先行研究はいくつか存在しており、かつ、藤原定家が生涯に渡って少なくとも一七回

は『古今和歌集』を書写したと共に様々な写本をも書写していることから定家筆本及びこれに準じる複製が多く存在するため、定家の仮名文字遣についての研究も多く存在する。

大野氏は「於」と「を」とはアクセントによって区別し「越」の仮名は「於」の同類として使用しているようである^{〔1〕}とし、「於」＝「越」という見解を述べている。また、小松英雄氏は「定家の仮名遣における「を」「お」の対立は表記の方式として作り出されたものであって……（中略）……「越」が「を」「お」のいずれに対しても補助字形でありうる事実は、中和ということではじめて説明が可能になる^{〔2〕}」という見解を展開している。このようにいわゆる定家の仮名遣については発音の高低による書き分けという論と変字の範疇となる論に集約されており、主として定家の書写本を中心としたものである。そこで、写本の

表記という面から再考し、『古今和歌集』の「仮名序」に見られる仮名文字遣を検証していくことにより書写された当時の仮名文字遣の一端について探ることを試みたい。

1. 検証方法について

現存する写本中「仮名序」を有する写本から『卷子本』『元永本』『清輔本（宮本本）』（以下「宮本本」とする）『清輔本（前田本）』（以下「前田本」とする）『伊達本』『嘉禄二年本』を対象とした。いずれも平安後期から鎌倉初期にかけての『古今和歌集』の古写本であり、発話言語が書記言語に影響を及ぼしつつある年代に該当するという点において、「年代」という観点が検証対象となり得るとした。これを踏まえて同年代・同系統・同筆という分類から次の三項目に分けて検証していく。

① 同年代同筆とされる『卷子本』『元永本』の二写本間においての仮名文字遣について

② 同系統に属する『前田本』『宮本本』の二本写本間においての仮名文字遣について

③ 定家本『伊達本』『嘉禄二年本』においての仮名文字遣について

検証を行うにあたり、語頭に「お」「於」「を」「越」を持つ語句を【資料1】【資料2】にまとめた。【資料1】として「お」「於」「を」「越」の使い分けが一致する語句を、【資料2】として、使い分けが一致しない語句をまとめ、これを古典仮名遣に照らし異なる語句は太文字で表した。更に【資料1】【資料2】の使用例数をまとめたものが【表1】である。

「越」については少数ながら特異な用例が見られたため、関連した項目で検証することとする。

【表1】 * () 内数字はをどり字の外数を示す

異体がない	卷子本	元永本	宮本本	前田本	伊達本	嘉禄二年本
お	10	22	3	3	1	
於	21	12	25	33	32	31
を	3 (1)	4	1	5	8	8
越		1 (1)	1 (1)			
乎	2					
その他 (漢字表記)	御大女	女小			思	思大

2. 『卷子本』と『元永本』における仮名文字遣について

『卷子本』『元永本』は同筆とされており、同筆間において「お」「於」「を」「越」の仮名文字遣に相違があるのか否かについて検証を行う。本稿で検証を行う他の四写本とは少し時代が遡るが、平安初期の同筆間における仮名文字遣の一端が分かるのではないかと考えられる。

【資料1】【資料2】より「お」「於」については次のように扱う事とする。「お」「於」は字母を等しくするだけでなく、「お」及び「於」の用字法のどちらかの使用で一致するため「お」「於」とみなす。また、「を」「越」に関して「お」「於」と同様であり異例は無いが、「乎むな」「をむな」という「を」に「乎」を使用する例が有るが混同例ではないため問題としない。

【表1】より古典仮名遣に照らした場合、唯一本来は「をはり」とすべきところ「おはり」と異なっている点が見られる。この異同に関しては遠藤氏が巻六―三三九の歌を例に挙げて「お」と「を」の混同について特異なことではないと説かれている。

「平安時代中期ころから盛んになった平仮名文献の書写活動において、語頭の「を」と「お」の混同はさして珍しいことではなかった。○あらたまの年のおはり（終）になること

にゆきもわかみもふりまさりつ、（巻六―三三九）がある。なお元永本と同筆の筋切本でも同様の表記は「おはり」となっている。³⁾

とし、「をはり（終）」を「おはり」、「をさめ（納）」を「おさめ」と誤った例は特異なことではないとすることで理解できる。また、「おはすて（姨捨）山」を「をはすて山」とする逆の混同例も見られるとしている。

以上のことから『元永本』が書写された元永三年（一一二〇年）において混同の用例は1例のみであり、ほとんど表記には反映されていなかったことが『卷子本』『元永本』の仮名文字遣において認められる。そして「をはり」とすべきところ、共に「おはり」と混同した表記が見られることから『卷子本』『元永本』という同筆とされている写本間においては「お」「於」「を」「越」の仮名文字遣に異同が見られないという事が確認できた。

3. 清輔本『宮本本』『前田本』における仮名文字遣について

『宮本本』『前田本』は共に藤原清輔系統の写本であり、六条藤家という歌道家における証本として書写されたものである。その筆跡から同筆とは認められないが、奥書からは同系統に属

し、同年代における写本と考えられる。このような伝授を目的とし、書写された同系統の写本間においてはどのような特徴及び相違が存在するのかを検証する。

『宮本本』『前田本』における「お」「を」の字母を同じとする文字の使い分けは「於とこ」と「をろか」「をろそか」の「お」「を」が一致する以外、残る二例（漢字表記があるものは除く）はすべて真逆の表記をとっている。なお、この二例はともに古典仮名遣の立場からいうと異なった使い方である。しかし、この件に関しては遠藤氏が『類聚古集』を例に挙げて「お」と「を」の混乱例は著しく存在することを説いている。しかし、『宮本本』『前田本』が同系統に属しているにも関わらず、「おとこ」「おとこやま」「おんな」以外の語頭用例が全て真逆であり、一〇例中八例が動詞である点も特記すべき相違と考えられる。

3. 1 『前田本』における助詞としての『をも』の特異な用例について

次に、問題としたいのは助詞としての「を」の仮名文字遣である。

冒頭近くに「をも」とすべき助詞について「おも」という仮名文字遣の箇所があり、『宮本本』には見られない。また他の

写本にも見られないため『前田本』の特徴と思われる。

遠藤氏は助詞「お」の表記について西本願寺本に見られる手慣れた能書家においても、助詞の「を」と「お」の混同が見られるとしている。また、永観三年（九八五年）ころ成立の『丹集』「つらね歌」に助詞「をも」で受けた形態の歌の存在を示し、「つらね歌」との関係から「をも」と「おも」の混同表記方法が要因となると説いている。これは修辭技法の一種であり、故意に意識した表記方法である。かつ、それぞれが助詞の「をも」、動詞の語幹に相当する「おも」となるため表記上は問題がない。

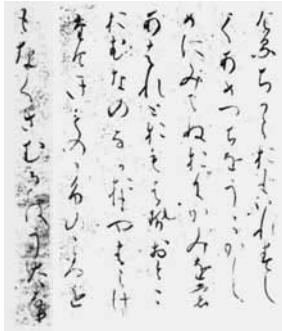
『前田本』にはこの助詞「をも」を「おも」とする仮名文字遣の用例が見られる。『元永本』などの勅撰集には見られないという遠藤氏の説からすると、『前田本』にはこの点における表記意識が希薄だったのではないかと考えざるを得ないという事になる。

鳥井氏⁵⁾は『宮本本』『前田本』を和歌の異同という観点から比較し、『前田本』の方が本来の形を多く維持しているとし、これを清輔本に代表させるといふ旨を論じている。しかしながら、「おちくる」と証本にあったはずの語句を「く」と「多」は非常に誤写し易い書体であることからくる「おちたる」とい

う誤写が見られることを述べている。また、別の箇所においても、「ひとさかり」という箇所については「いとさかり」とある証本の間違いを認識しながらそのまま書写しており、結果的には誤写になる箇所があることを述べている。つまり『前田本』は和歌の異同という観点からすれば本来の形を維持しているが、仮名表記という観点から見るとは正確さを欠くということになる。

【図1】『前田本』における「をも」と「おも」

（文中「」は改行を表す 以下同様）



*尾ノ・緒ノ・共に意味が通じる



「ち可ら^①於もいれ春し／
 豆あめつちをうこかし／
 めにみえぬ於るかみ^②を裳／
 あ者れと^③於毛^④者勢おとこ／
 於むなの奈可^①於も^④や者らけ
 堂介き毛の、布のこころ^⑤を
 もなくさむるは…」

*尾ノ・緒ノ・共に意味が通じる

【図1】に示したように『前田本』では特に「仮名序」の冒頭近くに三か所偏って見られる。これらの仮名文字遣を単なる書き間違えとするならば、この位置が冒頭に近く、まだ注意を払って書写していると考えられる位置での書き間違いという事になり、一文字違えず書写するという意識下においては有り得ない誤写ということになる。

写本中ではこの部分にはほぼ毎行 /om/ と発音する箇所が出現する。仮に単純に「お」と「を」が同音化していたことから来る同一化と見るならばすべて「於も」「於毛」あるいは「をも」「を裳」のいずれかで書かれていても差しつかえ無いと考えられるが、^②と^⑤は「を裳」「をも」と助詞と認識できる表記となっている。この点について検証を加えたい。

先ず、同丁面にかたまって見られること及び、「おも」の連続ではなく、「をも」を織り交ぜた使用となっていることから、この箇所が助詞であるという意識が書写者の中に残っていたと考えられる。しかし助詞「をも」の仮名文字遣が統一されていないということは書写する書写者の意識に何かがあったのではないかと考えた。つまり、親本を見て書写していくという過程そのものに違いがあったのではないかとということである。一字一句意味が通じるように間違えないように横に並べて書き

写すという姿勢で臨む場合と、文章をままとりに読んで暗記し、それを再生するという姿勢で書写する場合とは、後者の方が書き間違える割合が高くなる。

更に文章の記憶、再生という姿勢で書写した場合において誤った表記へと導く要素として前後の語句も大きく関与していると考えられる。

文章を少しまとめて暗記し、書写するという作業過程においては、書写者が読み取った字面より何かを連想する可能性がある場合、一見間違いとは気づきにくい間違いを引き起こすことが疑われる。これが助詞「を」にみられる誤った表記に繋がった原因であったのではないかと考える。つまり、語あるいは文意が通じる字面の場合、「を」の表記が「お」と入れ替わるという特殊性が『前田本』には見られるのではないかと推察される。

遠藤氏も敦忠集の例や承空本の例を挙げて同様の論を説かれている。(本稿最後参照参考)

更にこの部分は『前田本』において「**六**」のように書かれており単なる連綿とみるには「も」が「於」に食い込みすぎであり、合字を連想させる表記となっていることにも着目したい。つまりこの表記で一つの語として認識させる機能を持たせ

ていたということだと思われる。

また「お」が語中語尾に来ることがないというこの時代の国語的特徴を利用し、わざと「お」を使用することによって、句読点の代わりになるというような解釈もあるとする遠藤氏の説に従い、仮に語句の切れ目をこの位置にもつてきて解釈を試みると、

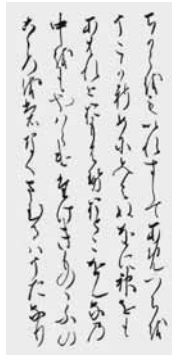
「おとおむなのなか おもやはらけ」(*空白は切れ目を示す)となり、このように文意が通じる場合には句読点としての代用が成り立つ。このことより、句読点の代用と仮名文字列からの連想による助詞「を」を「お」に入れ替える表記というのは表裏一体ということが分かる。これにより、「お」を単独で使い句読点の代用とみなすには無理があることが分かる。以上述べたことから、『前田本』における「おも」は単に句読点の代用というのも考えられない。

『前田本』における助詞の「を」の使用法の異なりは、検証してきたように「つらね歌」のような修辞技法から来しているのでもなく、句読点の代用という認識から来しているのでもない。つまり、書写意識の違いに基づく結果と考えられるのではないだろうか。

【図2】に見られるように『宮本本』においては「を」は

全て「をも」であり、連続していないため「をも」は助詞としての機能以外持たない。

【図2】『宮本本』における「をも」



ちつら越も (ちつら越も)
 林をも (神をも)
 中越も (中越も)
 (越裳)

*空白は非連続を表す

3. 2 『宮本本』における『越』の語頭使用例について

3. 1で『前田本』にお

特徴的な仮名文字遣について検証したが次に『宮本本』における特徴的と思われる箇所を取りあげたい。

【表1】において『宮本本』において一例(踊り字は省く)見られる「越」の仮名文字遣について検証する。【表2】に比較資料として各写本の該当箇所を挙げた。

嘉禄2年本	伊達本	前田本	宮本本	卷子本	元永本

【表2】に見られるように『元永本』『卷子本』いずれも「さ可え」で連続が一度切れている。しかし、『宮本本』では「さ可え越こ／里弓」となっている。「さ可え越」と表記されており、前行に「水乃あ者越」という箇所があることからいわゆるぎなたよみと考えられる。わかり易く図化したのが【図3】である。

【図3】

「…^①な三…と越^②な介き草乃露水乃^③あ者越^④みて」

③我身越をと踏きある八昨日八^④さ可え越こ／里弓…」

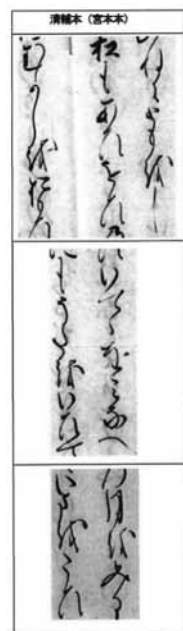
①②③は…部助詞が「越」で結ばれており、部の動詞に係っていくという文章構図になっている。このような構図が繰り返されたため④においても「さ可え越」と連続で書いてしまった、過失により「越」の表記に繋がったのではないかと考えられる。『宮本本』の中では「越」は助詞としての接続語尾としての用例が見られるが、唯一この箇所のみ語頭に「越」を使用しており、他は語頭には「お」か「を」を使用している。また、この部分は「あ者越」と「さ可え越」の「越」は並んでおり、『宮本本』では意識的に回避しようとした表記方法にも関わらず並

んでしまったと考えられる。「越」が並ぶのを回避しようとした用例を【表3】に示した。

なお、『前田本』における表記は「さ可へ於こ利弓」と連綿しておらず、誤写に繋がりにくいと考えられる。『伊達本』においても「さ可えをこ／りて」となっており、連綿せず語を認識しながら書写していることが伺える。『嘉禄二年本』でも「さ可／えをこ利て」とやはり語を解しての表記となっている。このように『宮本本』において「さ可え越 こ／里弓」と「越」が表記されたのはぎなた読みに属する書き間違えが、ここに唯一語頭に「越」を使用するという表記を引き起こした原因であると考えられる。

『宮本本』においては【図3】に見られるように「な三と越」^②「あ者越」^③「我身越」が「越」の助詞で結ばれた語を「な介き」みて「を」と路き」の動詞に係っていくという繰り返しの文章構成をうけたことに起因する「ぎなた読み」に属する書き間違えが「さ可え越」という表記に繋がったと考えられる。『宮本本』以外は「さかえ」で一旦語句が切れており、「おこりて」という語句として認識し易い表記方法となっている。

【表3】「越」が見られる箇所を用例



*変字という観点から見ても前後の行で「越」が並ぶと目移りし易いため『宮本本』では避けられている表記

*「月超」「い万越」対句的表現
仮名序最後の二行であり変字を必要としない例外的表記

4. 定家本『伊達本』『嘉禄二年本』における仮名文字遣について

次に定家本について検証をする。定家本は清輔本と同時期と考えられる。また、歌道家として御子左家、六条藤家として対立関係にあったことから、相違の有無について興味深い。また、『伊達本』『嘉禄二年本』は同筆という点で、先に検証を行った『卷子本』『元永本』との関係からも興味深く感じられる。

『卷子本』『元永本』との関係と同じく同筆という観点で見た場合、【表1】【表2】からは次のようなことが言える。定家本

である『伊達本』『嘉禄二年本』の二本の仮名文字遣においてはほとんど相違が無いことが分かる。【表1】より唯一異なる用例は「毛みちをおり」と「毛みちを於里」の箇所であるが、異なるとは言え「お」と「於」は字母を等しくするため、「お」と「を」の混同と同様というわけではないので、問題とはならない。

また、同時代の写本という観点から見た場合、『前田本』『宮本本』との相違においては『前田本』の仮名文字遣と傾向が類似していることが認められる。

『伊達本』『嘉禄二年本』間における相違についてであるが、語頭での異同ではなく語中に現れる異同のため【表1】【表2】にも載せてはいないが、唯一「あをやぎ」の「を」について『伊達本』において「あ越やき」と「越」の仮名文字遣を使用するという異なりが見られた。同筆においてなぜこの箇所のみ異なりが見られ、更に唯一この箇所のみ「越」が使用されているのかについて検証を行う。

「を」「乎」「越」の表記は $\backslash\text{ow}\backslash$ の発音の表記であることですべて一致しているが『卷子本』では「乎」、『嘉禄二年本』では「を」、『伊達本』では「越」となっている。ここで問題となるのは『伊達本』である。『伊達本』の写本中唯一この箇所の

み「越」が使用されている。他の $\backslash\text{ow}\backslash$ の表記はすべて「を」である。大野氏の定家仮名遣の見解は「越」は「お」「を」のどちらにも使用できる表記として位置付けているが『伊達本』に見られる使用方法はこれに当てはまらないと考える。

本稿で検証した『伊達本』のすべてが $\backslash\text{ow}\backslash$ を「を」と表記している $\backslash\text{ow}\backslash$ は「お」の代用ではないはずである。この事例に関しては次のように考える。

【表4】「あをやぎ」の用字法

元永本	卷子本	宮本本	前田本	伊達本	嘉禄2年本
					

『伊達本』は「あ越やき」となっているこの部分について小松氏は次のように説明している。

「…嘉禄本では「あをやぎ」「あをつら」となっている。これは伝統的な用字にたまたま一致しているだけで、それを継承しているわけではない。伊達本がそれらを「あ越」と表記して

いるのは、「あを」と書くことによつて「あお」と視覚

的に断絶されてしまうのを嫌ったためであろう⁶⁾

同じ定家本であるのに一方ではたまたま一致し、もう一方では「あお⁷⁾」と理解するのを回避するための策だと講じるのは疑問を感じる。

また、当時の色彩を意味する「あを」は「あお」の表記ではない事、更に「あをやき」「あをつゝらは」複合語であり、視覚的に（あお）と認識されても良い箇所である。表記は言葉で伝えるためのものであるので逆に（あお）と読み手に認識された方が、理解が早くできるため、ここでは視覚的断絶の回避を要しない箇所となるのではないだろうか。

一方、大野氏は

「於」と「を」とはアクセントによって区別し、「越」の仮名は「於」の同類として使用しているようである。⁷⁾

と結論づけているが、そうだとすると、『伊達本』における「あ越やき」は他の写本が「あをやき」と表記している部分に呼応する箇所であり、かつ『嘉禄二年本』においても「あをやき」と表記されていることを考慮すると、「あ越やき」では「越」⁸⁾に「を」に相当する表記ということになり、「越」⁹⁾に「於」という論とは一致しないことになる。このことより『伊達本』においては「越」¹⁰⁾に「を」ということになる。

ではなぜ『伊達本』において「越」を使用したのかについて触れてみたい。

『伊達本』においては「あるをやあをやき」と行替えすることなく書かれているため「越」に変えるという「変字」といふ法を用いることで見間違えを回避したのではないかと考えられるからである。

「：確かに藤原定家筆嘉禄本、同伊達家旧藏無年号本全体を見渡すと、「隣接を回避」している箇所が目につく。：やはり（かなり徹底した）「傾向」とみておくのが自然か¹¹⁾

と今野氏も「隣接を回避」の傾向にあることを指摘している。

しかし今野氏は傾向があるとするだけで隣接回避がトバシや目移りを防ぐことにはつながらないという見解を論じているこの件に関して稿者は以下のように見なす。今野氏の回避していない箇所として挙げている部分は「秋風にあへず」「秋はきぬ」と異なる語句の隣接であるため、判読に困難さを伴う箇所ではないと考える。また逆に『伊達本』において「相坂」が隣接し、回避されていないことを指摘し、且つ、五三六、五三七は丁をまたいでいるためこういう場所こそ隣接の回避が必要としているがこの点においても稿者は書写者が書写するという過程においては、「相坂のゆふ」あるいは「相坂の関に」と語句のま

とまりとして判読して書写するのが自然であると考え。更に、丁を跨っているからこそ、注意を払いやすい場所となるため今野氏とは逆に、隣接回避を必要としない箇所ではないだろうとも考えている。誤読、目移り、トバシが起こりやすい要因としては、仮名文字だけで同じような語句の繰り返しがある箇所であり、且つ隣接する箇所ではないかと考えているので、漢字という表意文字を使用し、同様の語句が繰り返し返されない箇所においては隣接を回避する必要性はないとみなす。これにより『伊達本』においては変字によると考えられる「越」の使用に繋がったのではないだろうか。

5、おわりに

今回「お」「於」「を」「越」の仮名文字遣を中心に写本間の異同について三項目に分類して検証を行った結果次のことが認められた。同筆とされている『卷子本』『元永本』とはほぼ異同はないということである。更に「お」と「を」の混同もほとんどみられない。しかし二写本間における仮名文字遣が全く一致するというわけではないので更に細部にわたって検証を要する。

また、『伊達本』『嘉禄二年本』という定家本においても同様に異同はなかった。定家の書写意識下では仮名文字遣に統一性があったことを示している。これに対し『宮本本』『前田本』においては清輔本系統に属しながら、二写本間では全く正反対の仮名文字遣ということが明らかとなった。『前田本』についてであるが古写本には違いないが西下氏も誤写が多いことを挙げ清輔自筆でないとし、久曾神氏も転写する際の誤りとは到底思われない箇所があることを指摘していること、及び検証してきたように書写意識が統一されていないと考えられること、また仮名文字遣から見るとこの二本の清輔本の性質が異なっていることが判った。また、歌道家として対立関係にあったが『前田本』と定家本双方の表記が類似している点は興味深いことである。清輔本と定家本の仮名遣いの相違については、「お」と「を」の混乱が激しい清輔本の時代の書写を受け、定家本ではそれを是正する形が試みられたのかもしれない。

定家は『元永本』『卷子本』が示すように古い年代に使用された「お」「を」の表記に回帰しようとしていたと同時に定家の時代における通常の発音に改めた方が自然だと思われる表記に関しては変化させていったのではないかと考えられる。

「越」についての仮名文字遣について、「仮名序」においては「越」

は助詞としての仮名文字遣が主であり、「越」が語句構成をなす使用例は「あ越やぎ」の一箇所のみであり「を」「お」のどちらにも使用されるという先行研究には該当しないことが確認できた。つまり「仮名序」という散文では「越」は「を」に属するということであり、「お」の代用という概念はなかったのではないかということである。「越」＝「お」と見られるとすれば、遠藤氏の論においてはつらね歌における検証であるし、中和という論を唱えた小松氏の検証も「和歌」に見られる傾向である。また小笠原一氏も「和歌」に見られると指摘している。掛詞との関係において「和歌」に現れた仮名文字遣が「越」⁽¹⁾＝「お」という論に結び付いたと考えられ、「仮名序」という散文には見られなかった。

(参照)

遠藤邦基氏も敦忠集の「○：けたれたるおもうれしとそおもふ」という部分を挙げ、「おも」は「面・母・重・想(思)」などの語彙に置き換えることができるとしている。

「先行文献の書写方法としては、必ずしも文脈や文章を熟慮し、意味を十分に理解しながら書写するのではなく、時には一連の仮名列から連想される同音の身近な語彙を、適

宜そこに当て嵌めて書写するということもあったのである。その場合、文脈上の矛盾がなければ、誤写に基づく文が異文として恒常的に固定する現象も生じるのである。⁽¹⁾」
ときなした読みを基にした解釈をし、書写段階において文意はともかくとして「けたれたる」＋「おも」＋「うれしとそ」と認識されていた可能性が存するということを論じている。

また、遠藤氏は承空本における「おる(折る)を「ヲル」へ改訂する現象の解釈として「同音語「居」との混同、乃至は掛詞により選択された仮名である可能性が強い。つまり上の句の「わらひおる」は「蕨折る」の義であろうが、つづく「やたのひろ野にうちむれて」からは「居」の連想も否定できない。⁽²⁾」と片仮名本においても同様の見解を論じている。

《注釈》

(1) 大野晋『仮名遣と上代語』『仮名遣の起源についての研究』岩波書店1982. 2

(2) 小松英雄『仮名文の原理』「藤原定家の文字遣」笠間書院H2. 10

(3) 遠藤邦基『国語表記史と解釈音韻論』和泉書院2010.

(4) 遠藤邦基『国語表記史と解釈音韻論』和泉書院2010.

7 p146

「○こひしきをなくさめてからこころみにかへしてみはやせるかな袖をも(四七二)

○おもひつつふるやのつまのくさもきもかせふくことにも
のをこそおもへ(四七二)

和歌には「をも」ではじまる語が存在しないための、苦肉の策といえなくはないが、〈ヲ〉と〈オ〉とが別音であれば、この「つらね歌」は成立しがたいことから、ここは片仮名文献と同じ範疇での解釈―語頭の〈オ〉と〈ヲ〉の同音化に基づく修―ができるのである。」

(5) 鳥井千佳子「清輔本古今集の性格」和歌文学研究48

1984・9

(6) 小松英雄『仮名文の原理』笠間書院 平成2 p91

(7) 大野晋『仮名遣と上代語』岩波書店 1982 p58

(8) 今野真二『日本語学講座』第2巻 清文堂出版

2011・4 p146

「○嘉禄本二八六 秋風にあへすちりぬるもみちはのゆくへ
よためぬ我そかなしき

○嘉禄本二八七 秋はきぬ紅葉はやとにふりしきぬ道ふみ

わけて問人なし

○伊達本二八六 秋風にあへすちりぬるもみちはのゆく
ゑさためぬ我そか／なしき

○伊達本二八七 あきはきぬ紅葉はやとにふりしきぬ道
ふみわけてとふ人／なし

○伊達本五三六 相坂のゆふつけとりもわかことく人や
こひしきねのみなく覧

○伊達本五三七 相坂の関になかる、いはい水いはて心
に思こそすれ

○嘉禄本五三六 あへさかのゆふつけとりもわかことく
人やこひしきねのみなく覧

○嘉禄本五三七 相坂の関になかる、いはい水いはて心
に思こそすれ

(9) 川上新一郎『六条藤家歌学の研究』汲古書院 1999.

(10) 小笠原一『学芸国語国文』12号

「定家自筆本のかなの用法―「越」の場合―」S511

(11) 遠藤邦基『国語表記史と解釈音韻論』和泉書院
2010・7 p149

(12) 遠藤邦基『国語文字史の研究』「片仮名書き和歌の

仮名づかい―平仮名本からの書写の場合― 和泉書院
2014, 7

《参考文献等》

遠藤和夫『定家仮名遣の研究』笠間叢書 2002, 1

遠藤邦基『国語表記史と解釈音韻論』和泉書院 2010:7

遠藤邦基『国語文字史の研究』「片仮名書き和歌の仮名づかい

―平仮名本からの書写の場合―和泉書院 2014, 7

大野晋『仮名遣と上代語』岩波書店 1982

小笠原一『学芸国語国文』12号「定家自筆本のかなの用法

―「越」の場合―」S.51, 1

片桐洋一『古今和歌集全評釈』講談社1998, 2

川上新一郎『六条藤家歌学の研究』汲古書院 1999, 8

小松英雄『仮名文の原理』笠間書院 平成2

今野真二『日本語学講座』第2巻 清文堂出版2011, 4

鳥井千佳子『清輔本古今集の性格』和歌文学研究48

1984, 9

元永本『元永本古今和歌集（日本名筆選30）』二玄社

1995

卷子本『卷子本古今和歌集（日本名筆選9）』二玄社1980

清輔本古今集（宮本本）『復刻日本古典文学館 古今和歌集清輔
本』日本古典文学館1973

清輔本古今集（前田本）『清輔本 古今和歌集』尊経閣叢刊

1928

伊達本古今集『古今和歌集伊達本』笠間書院1971

冷泉家時雨亭叢書『古今和歌集嘉禄二年本・古今和歌集貞応二
年本』朝日新聞社1994

（まつもと よしえ／本学大学院生）

